

七世紀および八世紀における

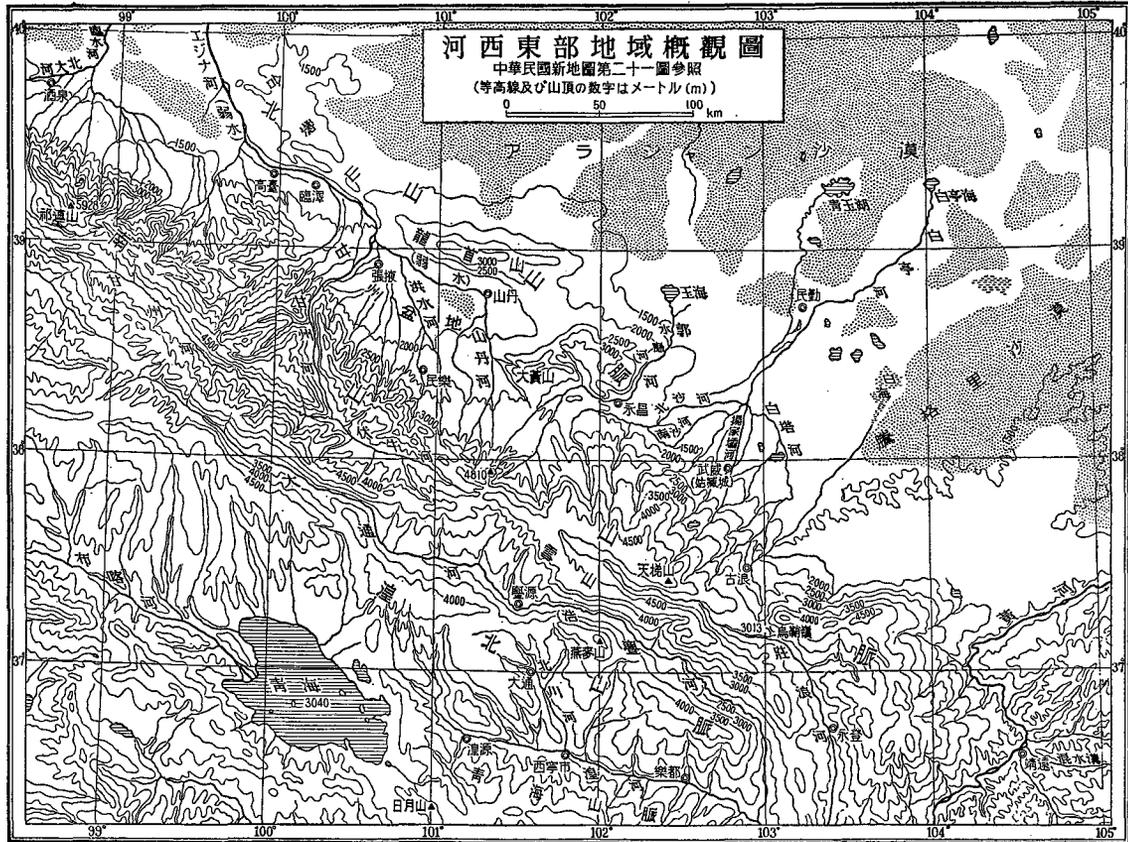
河西通廊地帯の農耕地拡大について

前 田 正 名

- 一 はしがき
- 二 七世紀の河西景観と甘州
- 三 八世紀前半期における農耕地の拡大
- 四 天宝期の河西と涼州
- 五 むすび

一、は し が き

ここで言う河西通廊地帯とは今の甘肅省武威県付近から南山山脈（祁連山山脈）の北側にそって西西北にのびた一条の緑地帯をさし、ほぼ敦煌県付近にまで達する狭長な帯状地帯である。がんらい中国史上、河西と呼ぶ場合、それは黄河の西方地域という意味で諸種の地域を意味して使用されている。漢魏南北朝時代には河西と言えはほとんど本論で述べる南山山脈北側、帯状の緑地帯を呼んでいるが、その後になって陝西省府谷県や葭県の西方すなわち唐宋代の麟州府州以西地域をさしたり、唐代の靈武の西方、賀蘭山山脈東麓黄河西岸地域をさしたり、また湟河地域をさす場合もあった。さらに唐代には隴右地方を漠然と言うこともあり、西夏時代については北流黄河西方の西夏の領土を



漠然と河西と呼んでいることもあって、必ずしも固定した一地域だけ呼んでいるわけではない。

しかし、前漢武帝が開置した河西四郡の地、すなわち、この前記武威県付近から敦煌県付近にいたるいわゆる河西通廊地帯が古来もっとも一般的に称されてきた「河西」であった。それは前漢書武帝本紀によれば、元狩二年（BC 一一一年）、匈奴の昆邪王が漢に來降したので漢は河西に進出することになり、匈奴と羌との連携を断ち切ることになった地域である。そして元狩二年には武威郡と酒泉郡とを設け、元鼎六年（BC 一一一年）には武威郡酒泉郡からそれぞれ張掖郡、敦煌郡を析置し、有名な武威、張掖、酒泉、敦煌の河西四郡が設置された^⑥。それまで匈奴の支配下にあった河西が、こうして紀元前二世紀末に漢帝国の経営下に入り、西北辺境の一般的な開発の進歩とともに河西もまた徐々に漢人の移住と農墾活動が行われることになったのである。史記大宛伝、前漢書本紀、同西域伝、匈奴伝等により漢の内地から甲卒が發せられて屯戍したこと、罪人や貧農が移住させられたことが知られるが、当時においては酒泉郡が中心になって開発が試みられていた。

後漢時代にも河西は漢人の支配下に入っていたから前漢武帝時代以来ひきつづいて漢人の経営が行われたが、魏を経て晋の時代になると一時、張氏政權が成立し、やがていわゆる五胡十六国の時代となり、多くの胡族が河西の各泉地、中でも東端部の涼州（武威郡）を争って「諸胡の窟宅」の觀を呈するようになる。そして五世紀半ば頃近く、北魏の太武帝が西進して河西討伐を行い、涼州の姑臧城を占拠していた沮渠氏を攻めた時の記録によると、涼州には南方の天梯山から流下する雪融け水と、各地に湧出する泉水とにより水が豊富で、まるで姑臧城は水に囲繞された「水の城」の様相をしていたことが知られ、付近山野に韭や蓼が多く密生し、水を引いて米や麦がつくられていた。水草は豊富で軍馬駐留に便であったという^⑦。魏書卷四下に、

初世祖伐河西也、李順等感言、姑臧無水草、不可行師。恭宗有疑色。及車駕至姑臧、乃詔、恭宗曰姑臧城東西門外流泉合於城北、其大如河、自余溝渠流入河中。其間乃無燥地、沢草茂生、可供大軍數年。人之多言亦可惡也。

と出ている。五世紀の涼州關係史料中もつとも重要なものであるが、唐代以後と異りきわめて河西に水量豊富であつたことが察せられる。一体四—五世紀頃から急に中国の西北辺境地域は乾燥化が進み、泉水量は減り、黄河水量も減じ、沙漠の波は南に拡大してくる。一般的に河西は乾燥化に向い、北魏以後特に漢人の経営を受けず、したがって農墾はすすめられていない。僅かに占拠する遊牧民が畜牧するのが主体であつて、可耕地が広く存するまま隋代に入る。しかし本格的に河西が開発されたのは八世紀に入ってからで唐長安元年以降、天寶期までの間である。

二、七世紀の河西景観と甘州

隋の大業年間、煬帝の積極策によつて吐谷渾の討伐が行われ、青海湖方面から河西、ターリム盆地東部方面にかけて交易活動の主導権を握っていた吐谷渾の拠点を一掃して隋朝の勢威が西北方に急に伸張し、河西に多くの西域諸國を招致して盛大な漢蕃交易を推進するようになった。大業五年(六〇九年)、吐谷渾を討つた後、鄯善、且末、西海、河源の四郡を設置し、ここに天下の罪人を配して戍卒として充て、大いに屯田を開いたことは、北魏太武帝以來、二世紀半を経過して久しぶりに漢人王朝側の経営が河西に始められたことを意味する。隋書卷二四食貨志に、

於是置河源郡積石鎮。又於西域之地置西海鄯善且末等郡、謫天下罪人配為戍卒。大開屯田、發西方諸郡運糧以給之。

と見え、同書卷六三劉權伝には、

帝復令權過曼頭赤水、置河源郡積石鎮、大開屯田留鎮西境。在辺五載、諸羌懷付、貢賦歲入。

と見えている。河源郡は青海湖南方の曼頭山麓に、西海郡は青海湖西岸地域に、鄯善郡はロプ湖岸に、且末郡はシェルシェンの地に比定されるから、直接河西の開発の明記こそ右の史料に示されないが、河西の南側や西方に農耕地が開かれていった点は河西そのものにも当然農耕地と漢人集落とが増加していったことを察せしめるものである。たとえば隋書卷四には義寧二年（六一八年）隋は玉門、柳城のほかに屯田を一時的ながらも興している。ともかく七世紀初頭に画期的経営が河西の南方、西方と河西に行われた。このため、裴矩は煬帝の意図を体してしきりに諸国商賈を河西に招致することができ、彼は主として張掖と武威との間を往来して漢蕃交易を掌った。隋書裴矩伝、西域伝、食貨志等にそのきらびやかな交易活動がうかがわれるが、大業五年六月煬帝自ら燕支山に幸じた際には西蕃二十七国が道左に謁し、焚香歌舞しての盛況ぶりは驚嘆されるほどであった。^⑨

しかし唐の貞観十四年（六四〇年）以前は唐も西域経営に積極的でなく、河西経営もほとんど進捗していない。かえって伊州、西州（高昌）方面の経営のために拠点地としての河西の住民には軍糧運搬等の負担が重く課され、州県は荒廃してしまった。すなわち旧唐書卷三貞観十六年春正月、同卷六二李大亮伝、新唐書卷一〇七陳子昂伝などに示されているように隋代の戦乱によるほか、河西の住民が伊州西州等遠隔地への屯戍に対する運糧のため徴発されて、このため河西では漢人集落の発展は見られず、漢人戸口は増加せず、かえって減少し、河西各地の農耕地は荒れ果ててしまったのである。七世紀中期においても依然、州県荒廃していたことはたとえば旧唐書卷一八五上王方翼伝に永徽中の東州を記して「時に州城荒毀して又塚壑なく、しばしば寇賊の乗ずる所となった」と述べているによっても察せられる。唐初貞観年間には多数の突厥諸族がエシナ河筋を南下して河西に侵入し、七世紀末には突厥のほか、吐谷渾、吐蕃、回鶻、契苾等諸族が河西各地に羈縻され、唐によって羈縻州府が多く設けられ漢人以外の諸民族が雑多に

混住して住民構成は従前より複雑となったが、漢人から河西を眺めると「土曠人稀」「州眞蕭条」としたきわめて開發の進められていない荒蕪地にしかすぎなかつたのである。顯慶二年（六五七年）阿史那賀魯の叛を鎮定してから急にインド北方、ペルシア方面に雄大な唐の西域經營が開始されるが、それでも七世紀末まで河西の住民は龜茲その他遠西の地への衣糧運搬等の役に徵發され、農墾の進展は到底望めなかつた。

垂拱年間、すなわち七世紀末、陳子昂の上疏文の中に、河西に突厥等諸胡が不隱の形勢を示していることを述べるとともに、当時の河西では涼州は農業が大して進んでいないこと、甘州は耕地広大で食料の貯蓄もあり、肅州以西の河西各地が皆甘州からの補給を受けていること、甘州は可耕地が広いが人力欠乏しているために未開地域が多いことなど述べた文がある。これは七世紀末の河西の開發状況を伝えたまことに貴重な史料で旧唐書卷一九〇、全唐文卷二一一にも載するが、今新唐書の陳子昂伝により重要部分だけ左に摘記する。

又謂、河西諸州軍興以來、公私儲蓄、尤可差痛。涼州歲倉六萬斛、屯田所収不能償墾。陛下欲制河西定亂戎、此州室虛未可動也。甘州所積四十萬斛。觀其山川、誠河西咽喉地。北當九姓、南逼吐蕃、姦回不測、伺我邊罅。故甘州地広粟多。左右受敵。但戶止三千、勝兵者少、屯田広夷倉廩豐衍。瓜肅以西皆仰其饋、一句不往土已枵飢、是河西之命係于甘州矣。且其四十餘屯、水泉良沃、不待天時。歲取二十萬斛。但人力寡之未足墾發。

涼州の歲収六萬斛に対し、甘州には四〇余屯あつて歲収二〇萬斛を得たという。そして肅州以西河西各地が甘州から食を受けていたというから、山丹河流域大黄山麓から西方、洪水河上流の多くの支流のなだらかな平原に河西で最大の農業生産力が見られたわけである。七世紀初頭、裴矩の活動により張掖中心にきらびやかな西域諸国と隋との交易が行われたが、七世紀には河西における農耕景觀も交易景觀も張掖（甘州）中心に展開されたのである。しかしながら、甘州に人力さえ充分あれば未開發地域がさらに開發され、農耕地を拡大し得るといふ陳子昂の上疏内容は早急

には実現されず、八世紀に入る。まことに七世紀の河西は、漢人にとっては諸記録が伝えるように「州県蕭条」「土曠人稀」の景観であった。

三、八世紀前半期における農耕地の拡大

唐の長安元年（七〇一年）以降、急に河西特にその東端部の涼州においてめざましい農墾が進められた。長安元年郭元振が涼州都督に任ぜられるまで、涼州の封界は南北四〇〇余里にすぎず、絶えず吐蕃と突厥との侵入に悩まされていたが、彼が涼州に着任してからは州境は一五〇〇里にも拡大され、南境の破口に和戎城を、北界の磧中に白亭軍を置いて吐蕃と突厥とを防止し、農耕地を準備した。郭元振は部下の甘州刺史李漢通にも命じて、屯田を開置せしめ、その水陸の利を画さしめたという。甘州に存していた広大な可耕地が李漢通により開発されたのである。旧唐書卷九七郭元振伝には、

元振始於南境破口置和戎城。北界磧中置白亭軍控其要路。乃拓州境千五百里。自是寇虜不復更至城下。元振又令甘州刺史李漢通開置屯田、尽其水陸之利。旧涼州粟麥斛至数千、及漢通取率之後、數年豐稔、乃至二匹絹粟數十斛、積軍糧支數十年。

と見えている。郭元振と李漢通の農耕奨励によって涼州の生産量増大し一匹の絹で数十斛の粟が買えるほどになり、軍糧に積んでは数十年を支えることができたというのである。

新唐書卷一二二にも対応記事が記載されて従来の涼州の輪広四〇〇里から州境拡大した事実を伝えている。南境の破口に置いた和戎城というのは今の古浪県南方に当り、当時の涼州昌松県洪源谷であろう。峡谷が急に開けて広い平原に出る位置に当り、溪流も急に緩やかになりひろびろとなる場所である。南方から莊浪河谷をたどり烏鞘嶺を

こえて北行してここまで来ると自然景観は一変して一面、平坦な原野田地が涼州城付近の扇状地に連っている。天梯山下に広く展開している涼州複合扇状地の東南端部に当る溪口と考えられる。北方の積中に置いた白亭軍とは白亭河筋に置かれその位置は新唐書の地理志によると涼州城西北五〇〇里の地点であったと伝えるが、正しくは東北方に当る。突厥の侵入に備えたものであった。こうして吐蕃と突厥との侵入を防ぎ、天梯山下に開発されていく涼州の農耕地を守備したのであった。

八世紀初頭の河西の農耕生産力の向上に唐朝も関心を払っていたことは、大谷文書にも現われている。竜谷大学所蔵の整理番号二八三五号文書に、甘涼瓜肅所居停沙州逃戸文書がある。末尾に長安三年三月十六日と明記してあるが、大谷文書中の最長のものである。この文献によると当時、沙州の農民が甘・涼・瓜・肅等の河西の各州に逃亡していたこと、官が熱心にこれら逃戸を沙州に帰還せしめようと努力していることが知られる。長安元年には天山山脈北側に唐の支配が伸張していく時期であり、翌長安二年に北庭都護府が庭州に設置されるから天山方面に広大な唐の領土が展げていく時に当たっていた。

開元期に入ってもほぼ八世紀初頭に展開された農耕景観はほぼ維持されていたと考えられるが、開元中期に河西を中心に激しい唐と吐蕃との争いがくりかえされ、開元十四・五・六年には河西西部が主戦場となったため、瓜州など河西の西部地域が灌漑設備を破壊されて農耕地は相当打撃を受けている。主として玉門以西では吐蕃と唐の死闘が行われている理由は⑥、甘州や涼州には吐蕃が侵入して戦うことができないほどに農耕生産力が高く、漢人集落の発達していたためである。それでも開元四年（七一六年）郭知運が河西を経営し始め、開元九年没すると彼の部下であった王君奭が代って河西節度使となり、開元十五年回鶻との戦いに没するまで河西は王君奭の支配下に入った。すな

わち開元四年から十五年まで河西は郭知運と王君彛により治められた。この間二人とも政治に熱心であり、河西の農耕景観は長安当時より衰退したとは考えられない。

開元期の河西の農業生産力の向上を示しているものに大唐六典尚書工部屯田郎中員外郎の条に見える河西各地の屯数を挙げることができる⁹⁾。これを示すと左の通りである。

赤水 三六屯、甘州十九屯、大斗十六屯、建康十五屯、肅州七屯、玉門五屯、安西二十屯

赤水とは涼州城内にあった赤水軍を、大斗は涼州城西方の大斗拔谷、つまり古来の赤泉を、建康とは今の高台县付近に位置していた建康軍を、安西とは瓜州付近の地をさしている。通典卷二食貨二屯田の条にある開元二十五年令によると一屯は五〇頃であった。当時の一頃とは大体わが国の五町五反余であるから涼州城内の赤水軍の屯田面積はほぼわが国の九九〇町と考えてよからう。赤水、大斗、甘州の屯数合計七一屯となり、河西全土の屯数の約七割に近い。これは河西東部地域が西部地域よりも農耕地が多く、生産が増大していた事実を示している。反対に甘州と肅州とのほぼ中間にあったと思われる建康軍管下の屯田、およびこの以西の屯数を合計してみても、河西全土の屯数の二割をこえず、赤水の屯数より少い。唐朝の経営下に農墾のすすめられてきた河西は、八世紀前半期にいよいよその甘州涼州等東部地域に主として中心が置かれ、乾燥度の高い西部地域とは生産力に大きい差が生じてきたのである。

特に涼州の農耕景観はみごとに発展していた。開元末期、涼州城の周辺は漢人により農耕地が拡大されていたが、樹柵により外側の吐蕃の牧地と境界していた。まことにきわどい国境風景ではあったが、新唐書卷二一六上吐蕃伝には「故時疆畔皆樹壁守捉」と記し、旧唐書卷一九六上吐蕃伝には開元二五年（七三七年）のことであるが、

時散騎常侍崔希逸為河西節度使於涼州鎮守。時、吐蕃與漢樹柵為界。置守捉。

と述べている。樹柵の列をへだてて内側は漢人の農耕景観、外側は吐蕃による畜牧景観が展開していたのである。この年、崔希逸の請により樹柵を撤去したところ吐蕃の畜牧が野を被うたと伝えられた同条の記事で理解される。

ともかく、八世紀に入ると、河西の農耕生産の中心地は七世紀と異り、涼州に移った観を呈してきた。それは天宝元年(七四二年)における唐の河西節度使管下の軍守捉の配備状況を検討してみると明らかである。節をあらためて論じよう。

四、天寶期の河西と涼州

資治通鑑卷二一五天寶元年春正月壬子の条に河西節度使管下の軍、守捉の配備状況を伝えて「河西節度使は吐蕃と突厥とを断隔するものであって、赤水、大斗、建康、寧寇、玉門、墨離、豆盧、新泉の八軍と張掖、交城、白亭の三守捉とを管し、涼、肅、瓜、沙、会の五州の境に屯し涼州を治所とし、兵は七万三千人であった」と述べている。そして元の胡三省がこの註をしてこの八軍三守捉の位置とそれぞれの兵数とを示している^⑧。新唐書卷四〇地理志涼州武威郡中都督府の条と元和郡県志卷四〇とを参照しながら右の胡三省の註を検討すると、大体示された軍と守捉の位置が見当つく。一つ一つの位置の詳細な考証はここでは省略するが大体の結論を述べると、

赤水軍 涼州城内にあり、鎮兵数三万三千人。当時の軍の最大なもの。

大斗軍 涼州城西方二百里、大斗拔(支)谷(古名赤泉)にあり、兵七千五百人。

建康軍 甘州西北方約二百里、今の高台县付近にあり、兵五千三百人。

寧寇軍 エジナ河下流域、ほぼ垂拱時代の同域の位置。兵八千五百人。

玉門軍 肅州西方二百里にあり、兵五千二百人。

墨離軍 瓜州西北方千里の位置、墨離海にそって置かれた。兵五千人。

豆盧軍 沙州城内。兵四千三百人。

新泉軍 会州西北二百里乃至三百里の位置、今の中衛県西南方。兵千人。

張掖守捉 涼州城南方二百里、兵五百人。

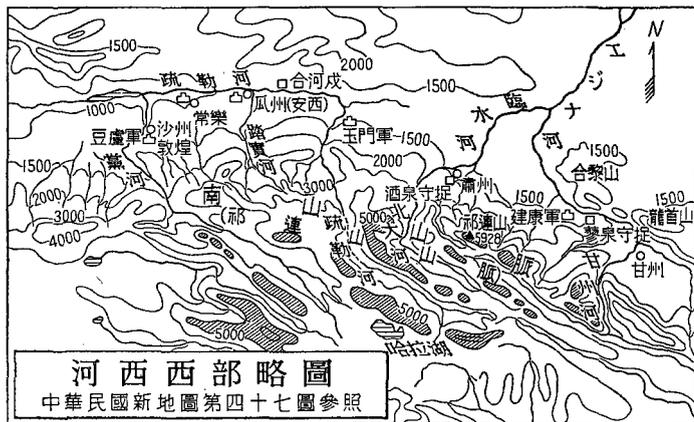
交城守捉 涼州城西方二百余里、兵千人。

白亭守捉 白亭河流域で涼州城東北方五百里の位置、兵千七百人。

守捉とは軍より小規模なものであり、さらに守捉より戍のほうが小規模であった。涼州城の周囲にはさらに戍が配備されていたことが新唐書地理志に記載されている。これによると涼州城東南二百里に烏城守捉があった。同書地理志の姑臧の条には姑臧県北方百八十里に明威戍が、西北方百六十里に武安戍があったと記している。姑臧県の位置は涼州城のあった位置である。なお昌松県の条には昌松県東北方五十里に白山戍があったと伝えてある。以上のように検討してみると、涼州城内赤水軍を中心にほぼ半径一五〇里から二〇〇里の間の距離を持つ円形を画いて、明威戍、武安戍、交城守捉、大斗軍、張掖守捉、烏城守捉、白山戍が取巻いて位置していたことになる。これは涼州城を中心有天梯山下の山麓に広く展開した複合扇状地を守備しようとした唐の態度を明らかに示したもので、まことにみごとな軍、守捉、戍の並び方である。

しかもさらに詳細に観察すると、白亭守捉は白亭河筋にそい侵入する突厥を防いだもの、寧寇軍、建康軍等はエジナ河筋によって侵入する突厥を防ぐもの、大斗軍は吐蕃が南山山脈の河谷から北進して来るのを制したものである。地図に位置を示してみるとそれは瞭然とする。

涼州の昌松県―おそらく当時の烏城守捉が置かれた―今の古浪県は天梯山麓北側の扇状地の中で最東端に当り、大



明威戍、武安戍、白山戍の三戍の鎮兵数は不明であるが、張掖、交城、烏城の三守捉鎮兵数は合計約八、〇〇〇人の故、三戍を少く見積ってもこの三守捉と合して約一〇、〇〇〇人とはなろう。すると赤水軍は三三、〇〇〇人、白亭守捉一、七〇〇人、大斗軍七、五〇〇人で総計すると約五二、五〇〇人となり、これを新旧両唐書の地理志に伝えられる涼州の天宝元年の口数一一〇、二八一に比較すると、鎮兵数は涼州人口の約半数に当ることになる。唐はすばらしい重兵を涼州城中心に開発された農耕地に配していたことになる。涼州城は典型的な軍事都市でもあり、城砦都市の性格を鮮明にしていたと考えてよい。

視野を涼州から河西全体ならびに河西の西方に転じると、河西の西部地域は軍、守捉、戍の配備状況は全く散在する農耕地を局部的に守備する形となって示されている。ここには涼州において見られたような統一性のある配置がされていない。甘州盆地はエシナ河筋にそい南侵する突厥入寇路をもっとも重点的に防備した態度が目目されるが、肅州以西は玉門付近、瓜州付近、沙州付近と点在する泉地や緑地を局部ごとに守備している。これは河西西部の乾燥度は東部より高く、沙漠地形が多くなり、沙漠や砂礫の中に湧出するオアシスや湖、疏勒河の灌漑水によって

のみ農業経営が可能で、緑地が分断されているからである。屯数も少いことは前節にふれた通りである。こうして天宝元年の軍、守捉、戍の配備は河西西部については涼州の場合と明瞭に異っているのを認める。

景雲二年(七一一年)、河西節度使が創設され、節度使の起源を為し、この年また河西は河西道として隴右道から独立した。そして河西道は実に広大で、他の道と全く異り、トルファン盆地やタリム盆地縁辺のオアシス国家、天山山脈北側、中央アジアを含み、遠く波斯都督府まで包含していた。天宝時代には西域貿易は極盛期に達し、河西はシルク・ロード東端部として漢蕃交易場、交通路として盛況を呈し、中でも涼州は西域文化を長安に仲介する役目を果たしていた地域となっていた。他の河西の各地よりも涼州にペルシア、インド、オクソス河上流域、当時の龜茲、高昌等から多くの商賈、僧、使節等が来、音楽、舞人、楽器、仏教、珍宝類その他西方伝来の諸種の文化が集中していた^⑩。このように考えると、八世紀前半期には河西の「地域の核」とも称すべき地はいよいよ涼州と断定してよい。これも天宝十四年(七五五年)安祿山の乱が起るとともに、間もなく唐の経営下から離れ、吐蕃の手中に没してしまふ。

五、むすび

八世紀半ば過ぎに安祿山の乱がおこり、唐はこの賊を防ぐため、西方に配置していた軍隊を長安の東北方に配備した。チベット高原に本拠のあった吐蕃は、このため急に東北方に侵出するようになり、一時は都の長安を占拠したとさえあるが、六盤山脈の麓一帯から西方、天山山脈にまで吐蕃の支配が及ぶようになり、河西は彼等の掌中に没してしまった。広徳二年(七六四年)に涼州が陥り、永泰二年(七六六年)に甘州が陥落し、ついで大暦元年(七六六年、永泰二年と同年)に肅州が没し、瓜州は大暦十一年(七七六年)、沙州は貞元三年(七八七年)に没した^⑪。河西は東

方から漸次、西方に向つて吐蕃軍の席捲を蒙っている。吐蕃は唐の県、郷、里の組織を廢止し、河西に千戸、万戸の組織を作り、新たに「部落」の組織を行い、本国から節児等の諸官を派遣して治めたが、河西各地の漢人の集団は唐支配時代とほぼ同様な風俗慣習を維持し、周囲を異民族に包囲されていながらそれぞれ孤立して自治組織をもつ集団生活を行った。そして異常に強く伝統的農耕生活を持續している。

五代会要卷三十吐蕃伝には、

開成之際、朝廷遣使還蕃。過涼。肅。瓜。沙。城。邑。如。故。

と述べて、開成年間（開成元年は八三六年）に涼州その他各地の「城邑」がもとどおりであったと伝え、州城景觀に大きい変化がおこっていなかったことを察せしめる。同書はさらにこれら漢人は言語がやや変化しているが衣服は改っていないと述べている。宋初、咸平元年（九九八年）十一月、涼州―当時の西涼府―から宋廷に達した折逋遊竜鉢の報告を静嘉堂文庫所蔵の宋刊本統資治通鑑長編撮要によつてみると、

旧領姑臧神烏番禾昌松嘉麟五県。戸二万五千六百九十三、口十二万八千二百九十二。今但有漢民三百戸、城周回五十里、如鳳形相。

吐蕃に陥没した後の史料が少ないためこれは貴重な、涼州付近の漢人集落に関するほとんど唯一の史料である。右によれば漢人三百戸があったという。八世紀前半期より激減しているのは止むを得ない。しかし、河西その他の緑地においても農耕生活の伝統は維持されている（詳述は省く）。

十一世紀前半期に河西は西夏の支配を受ける。西夏時代に入ると、吐蕃時代以上に、史料が稀少になり、涼州その他河西諸地の農耕の詳細が不明である。一般的には八世紀半ば過ぎ以降西夏時代を通じ、漢人の農耕地は開元天宝の

唐盛期より減少し、農耕景觀に衰退を来していることは明瞭である。

このように考えると、七世紀および八世紀前半期における唐朝経営下の農耕景觀の展開は、河西史上再び見ることでできないみごとなものであった⑩。

注

- ① 本論では河西四郡設置年代につき詳細な検討をしないことにする。一応、前漢書武帝本紀によって述べておいた。
日比野丈夫博士「河西四郡の成立について」京都大学人文科学研究所創立二十五周年記念論文集所収。
- ② 魏書卷四下、卷七上、卷三十五、卷一一〇、齊民要術卷五、十六国春秋卷五七、卷九四。
- ③ 資治通鑑卷一八一大業五年六月壬子。
- ④ 新唐書卷一二二郭元振伝。
- ⑤ 旧唐書卷一〇三張守桂伝。
- ⑥ 南宋本大唐六典尚書工部屯田郎中員外郎の条。
- ⑦ 資治通鑑卷二二五天宝元年春正月壬子の条に対する胡三省の註。
- ⑧ 陳慶雅著「支那辺疆視察記」
井上・武田訳
- ⑨ 東力支著「河西走廊」旅行家一九五六年八期所収。
長江著「中国の西北角」
紙幅上詳細にふれない。
- ⑩ 向達著「唐代長安与西域文明」
建中二年（七八一年）に沙州が陥ったという説がある。この説がむしろ従来多く言われてきた年代である。
- ⑪ 前田正名「河西の歴史地理学的研究」第二、三、四、五、六章参照。

（昭和四〇年一月三〇日稿了）